

1.8. 考察

若手福祉従事者へのプログラム提供ができています。

研修生の年代を見てみると、20代～30代が全体の70%以上を占めており、また、福祉の経験年数や、現在の職場での経験年数は10年以下が70%以上を占めている。

出稽古プログラムの目的である、「若手福祉従事者のリーダー育成」という観点からすると、適切にターゲットにアプローチできていると考える。

また、“出稽古プログラムの成果”や“学びを深めることができたか”の質問を見ると、満足度が高いことがわかり、若手福祉従事者にとって充実したプログラムになっている。

ただ、“出稽古プログラムの成果”で④～⑥の回答が他の回答より、評価が低くなっていることから、研修先とのつながり、新規事業創出、地域資源の活用に関しては、あまり効果が得られなかったのではないかと考える。これは、研修生が若手であり、この出稽古プログラムで得た経験を自分自身以外の人も巻き込んで生かしていくことの難しさがあるのではないかと考える。

地方ほど出稽古プログラムの利用率が高くなっている。

“研修生の所属団体の都道府県”（2 過去の出稽古プログラムの実績より）を見ると沖縄県が群を抜いて高いのがわかる。また沖縄県以外にも北海道、佐賀、大分と言った地方都市も上位におり、全体的に地方都市からの研修生が多いと言える。

この理由として考えられるのが、地方都市ほど、福祉が遅れており、他地域の先進事例を学んで、自分の地域で活かしたいという思いや、近くに先進的な取り組みをしている団体がなく、この出稽古プログラムが先進的な取り組みを体験できる非常に良い機会になっていることが考えられる。

その一方で、一度も研修生を派遣していない都道府県がある。出稽古プログラムの存在を知らない都道府県もある可能性があるため、今後は広報を強化し、すべての都道府県に情報が行き渡るようにする。

研修先の特徴・強みを勉強したいという思いが強い。

“研修先を選んだ理由”を見ると、「研修先受け入れシセルの特徴・強みに興味を持ったから」という意見が圧倒的に多い。研修生は特徴・強みを勉強し

たいという思いが強いため、今後は、受入先施設の広報の際には、HP では伝えきれない、受入施設の特徴・強みを発信する努力が必要である。

事業所へ連絡するのが広報に効果的

“出稽古プログラムを知った理由”を見ると、事業所からの連絡で知った者が半数以上と多い。これは、研修生が直接、出稽古プログラムの情報を入手したわけではなく、各事業所の代表や事務員等が入手し、それを内部で共有しているためであると考えられる。この点からすると、事業所に情報提供することが、研修生募集の最も有効的な方法であることが考察される。

4 まとめ

2008年後から実施してきた、出稽古プログラムも2013年度で6年目を迎えた。

今回のアンケート結果からも、100名を超える全国の若手福祉従事者に満足度の高いプログラムを提供できたといえる。参加した、研修生の中には、継続して出稽古プログラムに参加したいという声も上がっており、出稽古プログラム参加することで、意識が格段に向上していることがわかる。

また、出稽古プログラムに関する問い合わせも多く、福祉業界の中で、「出稽古プログラム」が浸透してきているのではないかと思う。

さて、まとめとして、今までの実績や研修生の声、社会の現状を踏まえて、今後の出稽古プログラムのあり方について提案したい。

●より若い世代の巻き込みをしていく

現在まで20代から～30代までのすでに福祉分野で働いている若手を対象にプログラムを提供してきた。

福祉のリーダーを育成する本プログラムだが、全国若手福祉従事者ネットワークの活動の中で、福祉従事者へのアプローチだけでなく、福祉従事者予備軍、すなわち、「大学生」へのアプローチが今後必要になってくると考えている。今いる人材をリーダーに育て上げることに加え、将来リーダーになり得る素質を持った大学生を福祉の業界に巻き込んでいく、そんな活動が必要である。

具体的には、本プログラムを活用し、大学生向けに、全国の先進団体を回るインターンシップツアーを実施することが効果的であると考えます。また、ただ見学するだけでなく、ワークショップを取り入れ、インターンシップツアーでの学びをしっかりと自分事に落としこむ作業も必要であると思う。

大学生に全国の先進団体の取り組みを体験してもらい、より福祉に興味を持ってもらい、リーダー候補を福祉への就職を促す、そんなプログラムが必要である。

●ネットワークフォーラムとのつながりを作っていく

全国若手福祉従事者ネットワークで地域の福祉従事者のつながりづくりのためのネットワークフォーラムを実施している。

今まで、出稽古プログラムとフォーラムの開催時期のずれがあり、ネットワー

クフォーラムで出会った仲間たちに、出稽古プログラムを紹介することが難しかった。

出会った仲間が持っている課題に対し、

「あの団体の取り組みを見れば答えが見つかるかもしれない」

「あの団体とつながることで事業が加速するに違いない」

という場面があった。

彼らの、ステップアップのために、出稽古プログラムという機会を提供できることは非常に効果的である。

●先進的な団体を一同に見る機会を提供する。

全国には紹介したい、出稽古にあってほしい先進団体が幾多もある。

しかし、出稽古プログラムの広報だけでは中々、その素晴らしさを伝えきれず、せっかくの機会を逃しているものも多いのではないかと思う。

そこで、先進団体の見本市を開催してはどうかと思う。

全国の先進団体が一同に会することで、そこの参加者は、複数の先進団体と出会うことができる。実際の担当者の話を聞くことで、団体の特徴や強みを深く知ることができて、出稽古プログラムを利用し研修への動機付けになるのではないかと考える。

●多様な福祉に対応するため、広義の福祉を巻き込んでいく

社会課題が多様になっており、障害福祉、高齢福祉、児童福祉といった既存の福祉だけでは対応できないことが増えている。

そのために、生活保護、引きこもり、不登校、ひとり親家庭や保育など、「社会保障」ということにまで視野を広げて福祉を考えていく必要がある。

福祉従事者にも、広義の意味での福祉を知ってもらうためにも、出稽古プログラムの研修先の中に広義の福祉の先進団体を取り入れたり、見本市でこういった団体を紹介したりして、活動を広めていく必要があると考える。

最後に、出稽古プログラムは福祉の発展のために非常に重要なプログラムであり、今後も発展しながら継続していくことを願っている。